

# 大切にしたい5つの心

野毛山幼稚園

## 【金子みすゞの心】

大正の童謡詩人 金子みすゞさん。

「いのちの尊さ」「生かされていることの喜び」「見えないけれどもあるということ」

小さな命をいとおしく大切に想い、優しい眼差しのみすゞさんは、相手の立場になり、時に相手の立場より低くなって物事を見ます。

見方を変えることで、今まで気づかなかったことに気づくことができ、見えなかったことが見え、聞こえなかったことが聞こえてきます。この世に存在するものを全て同等に見つめ、そこから深い悲しみを知りながら、優しく、相手をいとおしみ、個性の大切さを教えてくれ、見えるものを見たら、その影にある見えないものを見なくてははいけない。みすゞさんは見えないものの中に真に大切なことがひそんでいることを教えてくれます。



私と小鳥と鈴と。  
私が両手をひろげても、  
かまはちつとも飛べないが  
飛べる小鳥は私のやうに  
地面を速くは走らない。  
私がかうだをゆすつても、  
きれいな音は出ないけど、  
あゝ鳴る鈴は私のやうに  
たくさんは唄は知らないよ。  
鈴と小鳥と、それから私、  
みんなちがって、みんないい。

大漁

朝焼小焼だ  
大漁だ  
大羽鱈の  
大漁だ。  
浜はまつりの  
ようだけど  
海のなかでは  
何万の  
鱈のとむらい  
するだろう。

不思議

私は不思議でたまらない、  
黒い雲からふる雨が、  
銀にひかっていることが。  
私は不思議でたまらない、  
青い桑の葉たべている、  
蚕が白くなることが。  
私は不思議でたまらない、  
たれもしらぬ夕顔が、  
ひとりではらりと開くのが。  
私は不思議でたまらない、  
誰にきいても笑ってて、  
あたりまえだ、ということが。

## 【レイチェル・カーソンの心】

「感じる」ことはとても大切なことです。

レイチェルの著書「センス・オブ・ワンダー」の中に、『知ることは「感じる」ことの半分も重要ではないと硬く信じています』という一節があります。

子どもたちの世界は、生き生きとして新鮮で感動に満ちて輝いています。

園生活の中で、子どももおとなもわくわくドキドキ・アニメーション(スペイン語)の経験をたくさんし、たくさん感じる。日々の生活の中で自身のアンテナをめぐらせ、感性を持ち、子どもたちと共に共感できるものでありたいと思います。



「自宅のお庭に出ると、そこは東京とは思えないほど緑があふれていました。「人工的なガーデン」には興味が無いの上」と笑われる庭には確かに、草花が自然のままに咲き広がっています。見上げると、保護樹に指定されたソロの木の間から午後日の光が漏れ、私たちが柔らかに照らしました。

この庭に、上遠さんの自然や人生への思い「ありのままであることが美しい」とのお気持ちが現れているのではないのでしょうか。

上遠さんがライフワークと覚えるレイチェル・カーソンは、化学物質による環境汚染を世界で最初に告発した『沈黙の春』(一九六

撮影・御澤 敬

この人を訪ねて

## ありのままの自然の美しさに目をみはる感性を

レイチェル・カーソン日本協会理事長

上遠恵子さん

かみとお けいこ 東京生まれ。東京薬科大学卒業。研究室勤務、学会誌編集者を経て、現在エッセイスト。1970年の「サイレント スプリングのゆくえ」共訳以来レイチェル・カーソンをライフワークとし、「センス・オブ・ワンダー」「海辺」「潮風の下で」など多数の著作を訳す。また2002年秋には詳細な伝記「レイチェル」を訳出。長編記録映画「センス・オブ・ワンダー」では朗読者をつとめた。

二年)によって知られています。貧しかった当時の日本で農業は食料増産の救世主とまで呼ばれていましたから、農学部研究室に入った上遠さんは、これを最初は受け入れることができませんでした。しかしその頃から研究室に入ってくる情報も、各地での公害発生もまさにカーソンの警告をなぞるようなものになっていったのです。

その人となりを知るにつれ、身近に感じるようになる中で巡り会ったのが「センス・オブ・ワンダー」です。カーソンが幼い甥と一緒に、海辺や森を探索した経験を美しく綴った作品です。それは、厳密な科学的著作『沈黙の春』の背景にある心が、実は「自然の神秘や不思議さに目をみはる感性」にあったことを示しているのです。



「センス・オブ・ワンダー」(新潮社)、「レイチェル」(東京書籍)

だから上遠さんは、現代の環境破壊に対峙するためには、知識だけでは間に合わないと感じます。

「レイチェルが幼子に森や海辺の生き物との触れ合いや、夜明けや黄昏の美しさを教えたように、私たちが子どもたちに、本物を知らせることが大事なのです」

上遠さんは知識ばかりの子どもたちを憂います。机帳の中でうずくまる子どもの写真を見て、ある少年は「こういうのを自然淘汰って言っただよ」と言っただろうです。

「自然淘汰なんて難しい言葉は知らなくて良いのです。今の子どもたちは生命と一度でも向き合ったこと、トンボ一匹の羽をむしってしまった時の心の痛みを経験したことがあるのでしょうか。誰でも愛する人が苦しんでいれば手を差し伸べるでしょう。レイチェルは、大好きな虫や野草の生命をかがえのけないものと考え、化学物質から救いたいと願ったのです」

「センス・オブ・ワンダー」は記録映画化され、上遠さん自身が朗読者となりました。しかし上手にできず、夜中悩んで眠れないままに木立の中で悶々としていた時、人知を超えた所から、声が聞こえてくるような気がしたので、「ありのままがいいんだよ」と、上遠さんは、キリスト者の家庭に生まれ、幼時に洗礼を受けていましたが、信仰を確信されたのはそれから五〇年が過ぎました。

「神さまって忍耐深いと思います。映像の世界でも待つことは大切でした。花が咲かなければ、咲くのをじっと待つ他ない。今は時計の時間に追いつけられています。待つことによるのみ得られる世界があるのです。神さまはだから、私が花咲くのを、長い時間、待っていてくださったと思います」



## 【コルチャック先生の心】

ヤヌシュ・コルチャック ポーランドの小児科医 児童文学作家 教育者

1878もしくは1879年7月22日～1942年8月

「子どもは、未来ではなく、今を生きる存在である」(ヤヌシュ・コルチャック)

ナチスの侵攻下にあつて、孤児院を作り、200人の子どもたちと共に生活をし「子どもたちのためにならなんでもする」と少しの食糧を手に入れるために物乞いまでし、最後まで子どもたちを守り抜こうと、子どもたちと共に生きたコルチャック先生。

子どもの権利条約の基ともなった「子どもの権利の尊重」の著者でもあるコルチャック先生は平和の大切さと子どもに対する思い・心を学びます。

### コルチャック先生語録

「子どもを独立した一人の人間として認めない限り、自分の子であれ他人の子であれ、子どもを愛することは不可能だ。

私たち自身も大きな子どもだと自覚したとき、はじめて本当に理解できたのかもしれない」

「子どもを理解することは、その大人自身がいかに自分を理解するかである。子どもを愛するのは、自分自身をいかに愛せるかということ。

人は誰しも大きな子どもなのだから。」

「子どもたちこそ世界平和の架け橋」



## 【ロバートフルガムの心】

「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」ロバート・フルガム著

人間、どう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送ればいいのか、本当に知っていなくてはならないことを、わたしは全部残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は大学院という山のてっぺんにあるのではなく、日曜学校の砂場に埋まっていたのである。

わたしはそこで何を学んだだろうか。

- 何でもみんなで分け合うこと
- ずるをしないこと
- 人をぶたないこと
- 使ったものはかならずもとのところに戻すこと
- ちらかしたら自分で後片づけをすること
- 人のものに手を出さないこと
- 誰かを傷つけたら、ごめんなさい。と言うこと…(略)

人間として知っていなくてはならないことはすべて、このなかに何らかの形で触れてある。ここには、人にしてほしいと思うことは自分もまた人にたいしてそのようにしなさいというマタイ伝の教え、いわゆる「黄金律」の精神や、愛する心や、衛生の基本が述べられている。エコロジー、政治、それに平等に社会や健全な生活についての考察もある。

毎日砂場で起こるドラマの中にはさまざまなことがあることを忘れないでいたいと思います。

## 【秘密の心】

見えることばかりでなく、見えないものに目を注ぐ  
「心で見なくちゃ、ものごとは良く見えないってことさ。かんじんなことは目に見えないんだよ」

「星の王子さま」(サン・テグジュペリ著)でキツネが王子さまに言った言葉。

「星の王子さま」と「聖書」には多くの共通点があります。

「心の目」で物事を見ることを大切にしていきます。

